

今週から、各クラスでの合唱練習が始まりました。今日は9月30日。そして、明日からは10月…私にとって10月は、一番特別な「月」です。「私の母」と「合唱」について、忘れられないとても大切な「月」なのです。今回は、私の「母」の話をして下さい。

私の両親は、私が生まれる前、夫婦で店を始めました。田舎にある「何でも屋」です。食料品、日用品、文具、燃料…様々なものを販売していました。また、料理の「鉢盛」や「折詰」なども注文があれば、やっていました。ですから、当然、盆や正月の休みはありませんでした。私は、大学生になるまで初詣も行ったことがなかったし、1泊の家族旅行もしたことがありませんでした。昼間に遊びにつれて行ってもらっても、夕方帰ってくると、お客さんが困るだろうからと、また店を開けました。私と姉、妹の3人の子どもにとっては、毎日家の手伝いをするのは当たり前のことでした。

一本気でお酒と車が好きな父。仕事もよくするけど、金遣いも荒かった父。でも、そんな父を常にたて、私たち子ども達にたくさん愛情を注ぎ、育ててくれた母。母の口癖は「何があるかと明るく笑顔で!」、どんなに悪いことがあっても「感謝、感謝」でした。「いいことも悪いことも必ず自分のためになるから、常に笑顔で頑張らなきゃ」そんな母でした。

母がガンであることを知ったのは、12年ほど前のことでした。父から電話があり、病院に行きました。主治医の先生から、母が「大腸ガン」であることを聞かされました。正直信じられませんでした。手術すればきっと大丈夫だと信じて疑いませんでした。大腸の一部を摘出した手術は成功しました。しかし、先生は、「今後転移の可能性があるので定期的に検診をしながら進めます」とおっしゃいました。それから1年半ほどたったとき、「肺への転移」が見つかりました。もちろん手術はしましたが、病魔は確実に少しずつ進行していきました。入退院や手術を繰り返した母。7年前の夏頃には、足や脳にも転移が見つかり、激痛との戦いになりました。

7年前の9月30日の夕方、仕事をしていた私に、父からの電話。「倒れたので今、救急車を呼んだ…」急いで仕事を打ち切り、家に戻ると救急車が止まっていた。母を乗せた救急車は、なかなか動こうとしません。救急隊員の方から、受け入れてくれる病院がなかなか見つからないと聞き、テレビ等で知ってはいましたが、こんなことが身近にあるとはと、恨めしく思いました。なんとか、二日市の済生会病院に搬送されたのは、それから30分ほど経ってからだと思います。母は集中治療室に入り、2日間眠ったままでした。目を覚ました母は、元気そうでした。きっとこれから回復に向かう。そして、奇跡は起こると、私は信じて疑いませんでした。しかし、検査を終えた主治医の先生の言葉は、私たち家族を「愕然」とさせました。「ガンは全身に転移しており、もう手の施しようがない。あとは、安らかに眠らせてあげるしか…」私は涙が止まりませんでした。それでも「絶対に奇跡は起こる!」と自分に言い聞かせました。私は毎日、仕事を終えて病院に行きました。話ができるときは、母は決まって「ガンなんかには負けんよ。まだ、やりたいことがいっぱいあるけんね」と笑顔で話してくれました。私は、病院の帰り、毎日のように泣いて帰りました。心の中で奇跡が起きることを祈り続けました。しかし、病魔は残酷でした。母は、ほとんど目を覚まさなくなりました。ある日、いつものように母のベッドの横に座っていると、話せないはずの母の声が聞こえた気がしました。母の方に目をやると、母の口元がかすかに動いていました。耳を近づけると「何で、私がこんなことになったとかいな…悔しか…」とつぶやきました。そして閉じている瞼から涙が溢れてきました。私は母の手を握りしめ「大丈夫、大丈夫、きっと治る…」そう言いながら胸が苦しくて仕方ありませんでした。その日の帰りは、涙がいつも以上に止まらず、前が見えなくなりました。車を道路脇に停め、私は泣き続けました。涙というものがこんなにも出るものだとなりました。

10月21日早朝、病院から電話がありました。危険な状態ですからすぐに来て下さいと。それから一度はもちなおしましたが、その日の午後、家族や親戚が見守る中、母は息をひきとりました。70年間の人生でした。息をひきとる瞬間、母は一瞬だけ目を開け、口を動かしました。たくさんの人に「お礼」を言いたかったのだろうと私は思いました。母らしいと思いました。

その後、母の偉大さを改めて知ることになりました。22日の通夜には350人以上の方が、葬儀には150人以上の方が参列して下さいました。「こんなおばあちゃんの通夜に…」と私は、驚くとともに母を誇らしく思いました。

若いときから、「人のためになることなら…」と何でも率先してしてきた母。商売をしていたということもあり、近所のたくさんの方の相談に乗ってあげたり、趣味の日本舞踊を頼まれて様々なところで披露したり、地域や親戚の集まりには、決まって母が中心となって料理を作り、お世話ばかりしてきた母。こんなにも多くの方に慕われてきたんだと、改めてその大きさを知りました。

私が教師になろうと思ったのは、中学のときです。その時テレビで観ていた「金八先生」の影響もあるし、私が小学校、中学校時代に出会った先生方の影響でもありました。私は、両親の働く姿を常に見てきました。両親は、忙しいときには2、3時間しか寝ていませんでした。そうやって私たちを育ててくれました。だから私は、仕事は違っても、そんな素晴らしい両親に負けたくないと思って、教師という仕事を続けてきました。

母は、高校にも行っていません。成績は優秀だったそうですが、11人兄弟の母は家業の商売を手伝いました。「女が高校なんていなくていい。家の手伝いでもすればいい」と家にまで説得にきた担任の先生にも私の祖父は答えたそうです。「高校にも行きたかっただろうな…」と、ぼんやり思っていた私の心を震わせることを母の死後、父から聞かされました。葬儀も終わった数日後の夜の話です。父が私に、こんなことを言ったのです。

「あいつは、いつもお前のことを一番に考え、お前のことを心配し、お前の幸せを一番に願っていた。お前が高校入試のときには、あいつはお百度参りをしてお前の帰りを待っていた。そして、お前が大学に行き、採用試験に合格し、教師になったとき誰よりも喜んだのもあいつだ。お前には話してなかったと思うけど、あいつの中学校のときの夢は、教師になることだった。だから、お前が教師になったとき、自分の夢を叶えてくれたってあいつは心から喜んだんだ」と…。

高校にも行かせてもらえなかった母の夢が「教師」…私は、溢れる涙を止めることはできませんでした…

今までも私はこの仕事に就き、幾度となく挫折しそうになったり、くじけそうになったり、落ち込んだりしてきました。でも、目の前にいる子ども達のために頑張らなければ…と自分に言い聞かせ、28年間この仕事を続けてきました。子ども達に「絶対にあきらめるな!」、「頑張ることは素晴らしい!一生懸命はかっこいい!」と言い続けてきたからこそ、自分が諦めてはいけないと思ってきました。

そして、「母の夢」のことを聞き、母は私のことをいつも近くで見守ってくれていると改めて思ったのです。きっと、ピンチのとき、苦しいときこそ母は「笑顔、笑顔…」そして「感謝、感謝」そして、「いいことも悪いこともすべて自分のためだから」そう言って微笑んで見守ってくれているだろうと。

これからも、母の生き方に負けないように頑張ろうと思う私があります。まだまだ、母の足元にも及びませんが、私が「教師」であるために、もっと努力しなくてはいけないと思うのです。

そう思わせてくれるのがこの「10月」なのです。

私が教師であるために…教師が教師であるために…